はしがき

■ **編集の趣旨**

本書は、**《集中2週間完成》**シリーズの一冊として、古典文法の中でも大学入試の出題頻度が高い「識別」と「敬語」について演習問題を解きながら知識を整理することを目指して編集しました。

基本的な文法事項をひととおり学習した上で、さらに**古文読解に際しての重要な文法力、受験に即応した文法力**を確実に身につけたい、と考えている諸君に最適です。

■ **本書の特長**

1 学習日ごとに見開き二ページに収め、重要な「**識別**」を十日間、「**敬語**」を四日間で学習できるように振り分けました。

2 右ページ上段に、原則として、「まとめ」の欄を置きました。そうして、「識別」では「**識別パターン**」とその「**手順・解説**」を、また「敬語」では「**重要ポイント**」とその「**解説**」を組み合わせて、記憶すべき事柄を簡明に整理しました。

3 右ページ下段の「**基礎演習**」では、すべて典型的な短文による選択肢問題で、基本事項を確認します。

4 左ページの「**発展演習**」は、近年の入試問題の中から当日の項目に該当する設問を選び抜いて構成しました。一部手を加えたものもありますが大幅な改変はしていないので、これにより入試のレベルや傾向を知ることができるでしょう。

5 左ページの末尾に、必要に応じて「**暗記例文**」を示しました。パターンだけでは記憶しづらい場合、補助的に覚えるようにすると、読解の時にも役立ちます。

6 付録1として、「**まぎらわしい語の識別一覧**」を付けました。本文の「識別パターン」を補うものとして活用して下さい。

7 付録2として、「**主な敬語一覧**」を付けました。これも随時参照して、個々の敬語を確実に覚えるようにして下さい。

8 「**別冊解答書**」には、自学自習でも十分理解が行き届くよう、「**解答**」のほかに、具体的な解法を示した詳しい「**解説**」と問題文すべての「**口語訳**」を付けました。

特に「解説」には、本文で触れられなかった「重要知識」に言及しているところがありますので、ぜひ熟読して下さい。

また、文法問題はできるだけ文法的な処理だけで解答を導きたいとの考えから、問題本文にはいっさい注やヒントを付けませんでしたので、解釈の上で疑問がわいたら口語訳を参照してほしいと思います。

本書によって、諸君の古典文法の力が確実に一段上がることを期待しています。

編著者

目次

本編に入る前に 4

第1日 「なむ」の識別 6

第2日 「ぬ」「ね」の識別 8

第3日 「なり」（なる）の識別 10

第4日 「に」の識別 12

第5日 「けれ」（けり・ける）の識別 14

第6日 「し」の識別 16

第7日 「せ」の識別 18

第8日 「らむ」の識別 20

第9日 「る」（れ）の識別 22

第10日 「む」の意味の識別 24

第11日 敬語の種類 26

第12日 主な尊敬語・謙譲語・丁寧語 28

第13日 注意すべき敬語 30

第14日 敬語の考え方 32

付録1 まぎらわしい語の識別一覧 34

付録2 主な敬語一覧 38

本編に入る前に

まずは、次の二つの「例題」に挑戦してみてください。

《一》 われだに、ひとりうき旅にと思へば、さぞやおぼしてむと涙にしはぶきまぜて、わが子をおもふ如にいひけるに、「わがははの袖もちなでてわがからに泣きし心をわすらえぬかも」と誦して、いよよ親坐す国の恋しう、いかなる宿世にや、かく人の親の心の闇におもひたまへらむと、涙をとどめて、

いかなれば老いの涙のわが袖にかかるなさけをえやは忘れむ

（『来目路の橋』）

〔問〕 傍線部「おもひたまへらむ」の文法的説明として正しいものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

① 「おもひ」は名詞、「たまへ」は四段活用の動詞、「らむ」は推量の助動詞である。
② 「おもひ」は動詞、「たまへ」は四段活用の補助動詞、「ら」は完了の助動詞、「む」は推量の助動詞である。
③ 「おもひ」は動詞、「たまへ」は四段活用の補助動詞、「らむ」は推量の助動詞である。
④ 「おもひ」は名詞、「たまへ」は下二段活用の動詞、「ら」は完了の助動詞、「む」は推量の助動詞である。
⑤ 「おもひ」は動詞、「たまへ」は下二段活用の補助動詞、「ら」は完了の助動詞、「む」は推量の助動詞である。
⑥ 「おもひ」は動詞、「たまへ」は下二段活用の補助動詞、「らむ」は推量の助動詞である。

《二》 そなたのやうなる重宝なる人はましまさぬほどに、いつまでもと思へども、いづれも譜代の者にて、暇出だされぬ者どもなれば、まづまづいづ方へも出でられ候へ。

（『曽呂利物語』）

〔問〕 傍線部「出でられ候へ」の文法的説明として正しいものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

① 「出で」は動詞、「られ」は尊敬の助動詞、「候へ」は謙譲の補助動詞の已然形。
② 「出で」は動詞、「られ」は自発の助動詞、「候へ」は謙譲の補助動詞の已然形。
③ 「出で」は動詞、「られ」は受身の助動詞、「候へ」は謙譲の補助動詞の命令形。
④ 「出で」は動詞、「られ」は自発の助動詞、「候へ」は丁寧の補助動詞の命令形。
⑤ 「出で」は動詞、「られ」は受身の助動詞、「候へ」は丁寧の補助動詞の已然形。
⑥ 「出で」は動詞、「られ」は尊敬の助動詞、「候へ」は丁寧の補助動詞の命令形。

自信をもって答えられたでしょうか。どちらも大学入試センター試験の問題から抄出したもので、《一》は平成四年度「国語」の本試験、《二》は平成十年度「国語Ⅰ」の追試験の問題でした。

大学入試の古典分野では以前から様々なかたちで文法問題が出題されていましたが、近年圧倒的に多いのは、二つの例題に見られるような「**語の識別**」と「**敬語**」に関するものです。したがって、受験を目指す諸君は、基本的な古典文法をひととおり学習し終えたら、次のステップとしてさまざまな「語の識別」に習熟し、「敬語」に対する知識を確実なものにする必要があります。

では、「例題」に戻って、検討してみましょう。

《一》の着眼点は、1「**らむ**」が**一語か二語か**、2「**たまへ**」が**四段か下二段か**、3「**おもひ**」が**名詞か動詞か**、の三点に整理できます（このように、下の方から見ていった方が解決しやすいことが多い）。まず、「らむ」が一語とすれば、終止形接続（ラ変型には連体形）の助動詞ですから「たまふらむ」となるはずです。したがって、一語ではありえず①・③・⑥は除かれます。同時に「ら」が完了の助動詞（基本形は「り」）であることが確定しますから、その前の動詞は四段の已然形かサ変の未然形のいずれかです。ここで④・⑤が除かれ、3を考えるまでもなく**正解②**にたどり着けました。

《二》の着眼点は、1「**候へ**」が**謙譲か丁寧か**、2また**已然形か命令形か**、3「**られ**」の**文法的意味**が何か、の三点です。まず、そもそも謙譲の「補助動詞」というのはありえませんから（「はべり」「候ふ」は謙譲語としては本動詞のみ）、①・②・③は除かれます。また、活用形は係り結びになっていないので、命令形であり、⑤が除かれます。あとは残った④・⑥で「られ」の意味を考えるわけですが、この文の主語が「そなた」と二人称であること、また命令文であることから「自発」ではなく「尊敬」で、**正解は⑥**になります。

本書には、この種の問題に対応するための「**識別**」と「**敬語**」の要点を精選してまとめてあります。有効に活用してください。

第1日 「なむ」の識別

月　日　曜日

20分

識別パターン

A　未然形　＋なむ　⇩**他への願望の終助詞**
B　連用形　＋なむ　⇩**強意の助動詞＋推量の助動詞**
C　連体形／その他　＋なむ　⇩**強意の係助詞**
D　死／往（去）　＋なむ　⇩**ナ変動詞未然形語尾＋推量の助動詞**

【手順・解説】

1 まず、「なむ」の前が未然形か連用形かを確認し、**未然形**ならA終助詞、**連用形**ならB助動詞とする。

2 「なむ」の前が**未然形でも連用形でもない**ものは、次項を除いてすべてC係助詞である。

3 「なむ」の前が「死」「往」（去）に限って、D**ナ変動詞未然形語尾＋推量の助動詞**となる。

4 未然形・連用形が同じで判別できない場合、主語が**一人称**ならB助動詞、**二・三人称**ならA終助詞の確率が高い。また**係り結びの結び**にあたるものはB助動詞である。

5 **形容詞の連用形**に接続した場合、注意を要する。
- **本活用**（～く・～しく）なら、例外的にC係助詞。
- **補助活用**（～かり・～しかり）なら、B助動詞。

■基礎演習

次の文中、傍線部①～⑥の「なむ」の説明として、最も適当なものを後の語群から選び、記号で答えなさい。

(1) 母北の方、同じ煙にのぼりなむ①と泣きこがれたまひて……（源氏）

(2) もののあはれも知らずなりゆくなん②、あさましき。（徒然）

(3) 小倉山峰のもみぢ葉心あらば今一たびの御幸待たなむ③（拾遺）

(4) 願はくは花の下にて春死なむ④そのきさらぎの望月のころ（山家）

(5) あなうらやまし、などか習はざりけんと言ひてありなん⑤。（徒然）

(6) 今年より春知りそむる桜花散るといふことはならはざらなむ⑥（古今）

〔語群〕 a　強意の助動詞＋推量の助動詞　　b　係助詞
c　ナ変動詞の未然形語尾＋推量の助動詞　　d　終助詞

①［　］　②［　］　③［　］　④［　］　⑤［　］　⑥［　］

■発展演習

1 またある日、隣の男、妻といさかひ出だして、はてはその妻を逐ひ出だしけり。妻は泣く泣く蘭斎の方に来たりけるに、翁言へらく、「その里までやや遠し、日は暮れなむ①、今宵はここに明かしてよ」ととどめけり。夜更くるままに寒くなりゆくに、「家貧しければ別にふすまなどもたらず。ただここへ来たれ」とて、をのれがふすまの中へ抱き入れて伏させて、明日とく帰しやりける。「その夜、ただ幼きほどおほぢなどにいだかれたる心地したる」となむ②、語りけるとなむ③。

（間思随筆）

〔問〕 傍線部①・②・③の「なむ」についての説明としてもっとも適当と思うものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　あつらえの意の終助詞
イ　強調の意の係助詞
ウ　疑問の意の係助詞
エ　助動詞「なむ」
オ　助動詞「ぬ」＋助動詞「む」

①［　］　②［　］　③［　］

2 「ここにぞいとあらまほしきを、何ごともせむに、いと便なかるべければ、かしこへものしなむ①。つらしとな思しそ。にはかにも、いくばくもあらぬ心地なむするなむ②、いとわりなき。あはれ、死ぬとも思し出づべきことのなきなむ③、いと悲しかりける」とて、泣くを見るに、ものおぼえずなりて、またいみじう泣かるれば、「な泣きたまひそ、苦しさまさる。世にいみじかるべきわざは、心はからぬほどに、かかる別れせむなむ④ありける。いかにし給はむずらむ。……」（蜻蛉）

〔問〕 傍線部①～④の「なむ」について、

(a) 用法の異なるものが一つだけある。記号で答えなさい。［　］

(b) (a)で答えた「なむ」について、文法的に説明しなさい。［　　］

●暗記例文●

A　花咲かなむ。（花が咲いてほしい。）
B　花咲きなむ。（花がきっと咲くだろう。）
C　花なむ咲く。（花が咲く。）
D　花の下にて春死なむ（桜の花の下で春に死にたいものだ）